

令和2年度
福島県 大学生等による地域創生推進事業

喜多方市高郷町本村地区実施成果報告書

獨協大学ほんそんみらいプロジェクト

指導教員 経済学部経営学科 大坪史治

【目次】

1. はじめに	3
2. 喜多方市高郷町本村地区の概要	3
3. そば打ち事業	4
4. 来年度に向けて	6
4.1 現地での活動の場合	6
4.2 オンラインでの活動の場合	7
5. 結びに	8

1. はじめに

獨協大学地域活性化プロジェクトは 2018 年度に「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に応募し、3 年目となる今年度から「大学生等による地域創生推進事業」としてスタートした。現在も本村地区との交流は継続し、ともに活動している。1 年目の実態調査では学生グループが実際に集落に足を運び、集落が抱える課題に対して企画提案をした。2 年目となる 2019 年度は実証実験として昨年度に企画提案したフットパスツアーを試験的に実施した。3 年目の 2020 年度は団体名を「獨協大学ほんそんみらいプロジェクト」に変更し、引き続き活動を行っている。

福島県高郷町本村地区を担当する 2020 年度メンバーは宮本圭(学生代表:国際環境経済学科 3 年)、飯田佳暖(副代表:フランス語学科 3 年)、窪谷ちひろ(会計:英語学科 4 年)、猪爪麻衣子(フランス語学科 4 年)、清野芽生(フランス語学科 4 年)の 5 名と、新メンバーとして 1 年生と 2 年生が 7 名加わり、計 12 名で活動している。

今年度は新型コロナウイルスの流行により、現地での活動を断念し、思うような活動ができなかった。そのため、オンライン上でメンバーたちと頻繁にミーティングを行ったり、集落の方とオンラインでの交流を図ったりなど、コロナ禍ならではの活動を行ってきた。

2. 喜多方市高郷町本村地区の概要

本村地区は会津地方の最北、喜多方駅から 13km、最寄り駅の荻野駅から 3km の場所に位置している。人口は 43 人、世帯数は 13 世帯であり、高齢化率は 53% と非常に高い。一級河川の深山川沿いに集落が密集しており、標高は約 250m である。主要産業は農業で、主に稲作やそばの生産が盛んである。また、集落が山間地にあり、斜面が多いことから集落には棚田が多く見られる。

本村地区は高郷町の行政区の一つであった。しかし、高郷村は 2006 年に喜多方市、熱塩加納村、塩川町、山都町と合併して新しく喜多方市が発足された際、新たに高郷町という名前と呼ばれるようになった¹。

¹ 喜多方市ホームページ(以下の URL)参照。
(<http://www.city.kitakata.fukushima.jp/>)

図表[1] 喜多方市の位置



3. そば打ち事業

今年度はコロナ禍で集落の方とはもちろん、メンバー同士でも直接会うことが困難な状況が続いた。その中でも、集落の方々との関わりやメンバー同士での繋がりを継続させようと、このような状況下でも少しでもできることとして、これまでの活動の中で集落の方から教えていただき、定期的に行ってきたそば打ちを行った。

久しぶりの活動だったが集落の方に教わったことを思い出しながら衛生面に細心の注意を払い活動を行った。今回そば打ちをするにあたり、今後もそば打ちを受け継いでいけるよう新しい本格的なそば打ち道具を購入した。

また、新メンバーとの顔合わせの機会ともなり、初期メンバーが見本を見せつつ新メンバーとそば打ちをしながら打ち解けることができた。本村に行くことができていない新メンバーにも会津のそば粉を使い、少しでも活動や本村を味わってもらいモチベーション維持に努めた。

活動の途中で集落の区長とビデオ通話を行い、新メンバーと区長が交流することができた。そば打ちを始めて二年目となり、想定よりも上手く作ることができたが、やはり直接ご指導いただき集落の方々が打ったそばが食べたいと思い、直接的な交流の必要性や重要性を改めて痛感した。

そば打ち後には Instagram による SNS での発信を行い、本村、私たちの活動の知名度向上につなげた。そば打ちはメンバー同士、学生と集落をつなぐ交流のツールの一つとなっているため、継続していきたい。

写真1 区長とのオンライン交流の様子(宮本撮影)



写真2 そば打ちの様子 (宮本撮影)



4. 来年度に向けて

今年度は新型コロナウイルスの影響により現地で活動することはせず、メンバー同士も感染拡大防止のため極力集まることを避けて活動を行った。来年度は本来であれば今年度予定していた活動を行い、それに加えて新しいことにも意欲的に取り組んでいきたい。また、来年度も現地に行くことができない場合を考慮して、現地での活動の他にオンラインでの活動も提案する。

4.1. 現地での活動の場合

①PR 動画作成

概要	PR 動画の撮影
具体案	<ul style="list-style-type: none">・ドローンを使用し空撮する。・農作業の様子やイベント時の様子を撮影する。・動画サイトや SNS に投稿する。

昨年度までは、活動の様子を写真には残していたものの動画の撮影は行っていなかった。昨年の報告会で動画を流していたチームがあり、どのようなことを行ってきたのか非常に分かりやすかった。例えばフットパスツアーは、写真よりも映像の方がその場の雰囲気により伝わりやすく、参加者の視点で撮影すればまるで自分がそこにいるかのような感覚を味わうことができる。写真を見せつつ説明するよりも分かりやすく伝えることができると考える。撮影した動画は報告会で使用することができ、さらに動画サイトや SNS に投稿することで本村の知名度向上につなげることができる。

今年度行ったミーティングで、ドローンを購入し空撮をしてみたいという案が出た。本村地区は非常に高低差のある集落であり、徒歩や自動車集落全体を撮影することは容易ではない。そこでドローンを使用することにより短時間で撮影を行うことができる。また広大な敷地のそば畑があり、花が辺り一面に咲く様子は非常に圧巻である。地面を覆うほど咲くため中に入った時にそばを踏んでしまい、景観を損ねてしまう可能性があるが、上から撮影することでこの事態を防ぐことができる。よって、写真に残すことに加え、動画を残すことも忘れずに活動していきたい。

②フットパス事業

概要	フットパスツアーの開催
具体案	<ul style="list-style-type: none">I.フットパスの視察をする(西郷村・町田市)II.本村地区のフットパスコースを整備するIII.フットパスツアーを企画・実施する

I. フットパスの視察

一昨年の 11 月に参加者を募りフットパスツアーを開催したが多くの改善点が挙げられた。試験的な開催であり、またツアーガイドは本村の区長に行ってもらった。最終的な目標として学生が主体となりツアーを開催したい。しかし、学生にはツアー運営の経験がなく、円滑にツアーを進めていくために、フットパスが盛んに行われている地域に行き、フットパスに参加することでヒントを得たいと考えている。候補に挙げられている場所は、福島県西郷村と東京都町田市である。西郷村は日本フットパス協会会員であり、本村からも比較的近い場所に位置している。さらに西郷村の地域おこし協力隊の方から連絡を頂き、繋がりができたことから来年度参加させて頂きたいと考えている。次に挙げた町田市は日本フットパス協会のある地域であることに加え、本プロジェクトメンバー全員が関東圏在住のため参加しやすいことが理由である。以上 2 地域のフットパスツアーに参加し、私たちがツアーを円滑に運営するために参考にしたい。

II. フットパスコースの整備

休憩地点やフォトスポット、フットパスコースが分かりにくいという意見が出たため、それを解消するために看板を設置することを予定している。

加えて、急斜面を下る箇所や雨が降ると滑りやすくなる箇所があるため、怪我防止のためのロープの設置も行いたいと考えている。

III. ツアー企画

まず各シーズンに 1 回ずつ、合計で一年に 4 回開催することを予定しており、フットパスに加えてその季節のイベントも開催したいと考えている。春には花見を、夏には深山川で川遊びやスイカ割り、秋には紅葉狩りや焼き芋作りを、冬には餅つき、かまくら作りを行うことを予定している。また、昨年度のフットパスツアーの参加者から「予想以上に道が陰しかった」と意見を頂いたため、靴はトレッキングシューズを推奨することやコース内に登山のような険しい箇所があることを事前に参加者に伝える。

4.2. オンラインでの活動

今年度同様に新型コロナウイルスの流行によって現地での活動が困難になってしまった場合、私たちはオンライン上でどうやって活動を進めていくべきなのか。この 1 年間でオンラインで活動してみた結果、コミュニケーションが最も重要だと感じた。それは学生と集落はもちろんのこと、学生同士でも大切である。今年度、学生同士や学生と集落間でのオンラインミーティングは数こそ多かったものの、不定期であった。そのため、ミーティングとミーティングの間が 2 週間やそれ以上空いてしまうこともあった。また、今年度から加わった 7 名の新メンバーは、本村区長としか関りがなく、まだ集落のことをほとんど何も知らない

状態である。来年度は各週定期的にミーティングを行い、活動の話はもちろん、ここ1週間の近況などたわいもない話も互いに話し合っ、学生と集落間、学生同士のコミュニケーションをより円滑にしていきたいと考える。また、集落の集会所などにモニターを設置することが可能であれば、テレビ通話などを通してミーティングを行いたい。そうすることで、通常のミーティングに比べ、顔が映る分、円滑にコミュニケーションをとることが可能になると考える。加えて、まだ現地活動を一度もできていない新メンバーも本村地区にどのような人がいるのか知ることができる。これらのことから、オンライン上の活動では今年度以上に交流を深め、より集落と学生の関係が深められるよう努力していきたい。

5. 結びに

今年度は、福島県の皆様、大学の職員の皆様、先生方のご協力のもと、お陰様で本村地区とのご縁が3年目を迎え、初めての「大学生等による地域創生推進事業」となった。

しかしながら、昨年から世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスの影響で、予定していた現地の活動や、イベント出店等がすべて中止となってしまった。このままでは、大切に積み上げてきた本村の方たちとの絆が希薄になってしまうことを危惧した我々は、今一度この活動の意義、メンバー一人一人の活動に対する思いを再確認する場を設け、コロナ禍によってできないことに目を向けるのではなく、コロナ渦の中でもできることに目を向けていくことに方針を決め、今年度の活動がスタートした。

この活動の意義、と記したが、我々が思うこの活動の意義は、「大学生という若い外の視点から、少子高齢化が進む集落を興す」ということも勿論含まれてはいるが、それ以上に、そしてそれ以前に、「人との繋がり大切さを学ぶことができる」ことにある。現場に入らないと分からないと思うが、ひとりの人間と人間の関係構築には、相当な時間とエネルギーがいる。その時間とエネルギーを割いた先に、初めて人間同士の信頼関係が生まれ、その信頼関係が新たな力となって、初めて集落が興るのだと思う。言い換えれば、信頼関係無しに、集落は興らないということだ。それを踏まえて、今年度この活動で最も感動したことを記させていただきたい。コロナ禍によって集落の方たちと一度も会えない中での活動。そんな中、区長さんが「本村ふるさと便」(写真3)と題して、一人暮らしのメンバーたちに、本村の農産物が入った贈り物をして下さったのだ。3年前までは見ず知らずの人間同士だったのが、時間をかけて交流を重ね、農産物を送ってくださるまでになったことに純粹に感動した。会えなくても、心と心は繋がっているのだと感じた瞬間だった。

写真3 本村ふるさと便



課題として残るのが、次世代への引き継ぎである。1年目から活動しているメンバーとして、4年生が3名在籍しており、今年度で大学を卒業する。ありがたいことに、今年度から1年生、2年生合わせて7名の新メンバーが加入してきた。もちろん、4年生が卒業しても本村との関係は続いていくが、主となって活動するメンバーの世代交代をする時期である。新メンバーの1, 2年生はコロナウイルスの影響で現地に一度も行けず、実際に集落の方とも会っていないので、現地活動の意義を実感できていない難しさはあるが、できる限り、3年生を中心に、1年目から活動しているメンバーで、しっかりと「この活動の意義」の継承をしていきたい。

新型コロナウイルスの影響によって未だ先行きの見通しが立たない世の中ではあるが、どんな状況にあっても、「信頼関係無しに、集落は興らない」という精神で、今後の活動も行っていきたいと思う。

結びになりますが、我々にこのような素晴らしい気づきと学びをさせて頂く機会を与えてくださった福島県の皆様へ、この実績報告書という名のお場をお借りして、心から御礼を申し上げます。

参考文献

[1] 喜多方市ホームページをもとに作成(以下の URL)を参照。
(<http://www.city.kitakata.fukushima.jp/>)